

介護実習における「介護過程の展開」について

— 実習効果を上げる演習項目は何か —

About "Development of Care Process" in Care Training
— What is the item which achieves the training effectively ? —

富岡郁子*

Abstract

The 2 year welfare course students finished all the trainings and this reports the actual results of "Development of Care Process" practice which were investigated by the questionnaires. As the results of it, even if the student understood theoretically, it was so hard for him or her to understand the inside of the person, the real case, the communication skills for a short period of training practice. All the students need to learn the actual communication skills, many case studies, the ways to solve the problems to strengthen the thinking process of care, the power to express themselves and how to write the records.

キーワード：介護過程の展開／介護実習／学びのプロセス／実習効果／演習項目

本学は介護福祉士養成2年課程2年次において、施設介護実習Ⅲ・Ⅳ段階を18日ずつ実施している。両実習とも目標は、「介護過程の展開」を実践することである。

「介護過程の展開」は、情報収集に始まり、アセスメント、解決すべき課題の焦点化、介護計画立案、介護計画実施・評価、見直しと続く一連の介護過程である。学生は、対象者を決定し、取り組み可能な課題を設定し、介護計画を修正しつつ、介護過程を実践する。

本報告は、Ⅳ段階実習を終えた学生に対し行った調査結果をもとに「介護過程の展開にかかる実習」の実態を明らかにし、効果的な実習に繋げるため強化すべき学内での教授内容や演習項目を探るためのものである。

調査の結果、学生は情報収集、アセスメントの概要について理解していたつもりでも、実際の場面では対人援助技術の未熟、コミュニケーション

不足や、情報の整理に時間がかかり、立案した介護計画の実施期間が短くなってしまったケースが多いことが分かった。現場では専門職として短時間に情報収集できる力とアセスメント能力が問われている。

学内演習において、概念化された知識の範囲にとどまらず、事例を通してより実際の状況が想定できる演習を経験しておくことが必要であると考えられる。見たことや感じたことを適切なことばで伝えられることと、記録できることが、表現する力、コミュニケーション力を高める。学生は、実際の実習において、問題意識をしっかりと持ち、遭遇する経験を通して、確実なスキルとして総合的な対人援助技術を身につけていくことができるのではないかと。今回の調査結果から「コミュニケーションスキル」「課題の解決志向：介護過程の思考プロセス」「表現する力、記録」の強化が必要であると思われ、これらを「多くの事例を用いた学習方法で行うこと」と、実習後の個別の振り返りを丁寧に行うことが必要であることがわかった。

* Ikuko TOMIOKA
北陸学院大学 人間総合学部 社会福祉学科
介護実習

1. はじめに

介護を取り巻く社会の状況は、介護を支える人材不足に象徴されるように、養成校としても耐え難い状況にある。介護福祉士を目指す学生の保護者は学生の意志に反して、介護職に就くことを健康面と経済面から危惧している。そのような状況の中で幸いにも、本学の今年度の学生はほぼ全員が介護職に就くことを前提に実習を終えた。

介護の質を高めるべく介護福祉士法の改正により、介護福祉士養成課程は2009年度から「新カリキュラム」を施行することとなった。

今求められている介護のニーズは「尊厳を支える個別的なケア」である。個別ケアを実践するためには、チームで対応し、連携することも必要である。「個別ケアの実践」は「介護過程の展開」によるものである。

現行カリキュラムにおいて、「介護過程」は教育課程の改定¹⁾により2000年から盛り込まれたものである。本学では「介護過程」は科目「介護概論」の一部に位置づけて講義されるとともに「介護技術」で事例展開2例の授業を行っている。また「介護実習指導」において事例を検討し、所定の記録用紙に記載する演習を行うに留まり、学生の理解に十分な時間が確保できていたか疑問なところであった。

そこで、本調査により学生の「介護過程」の理解と「介護過程の展開」の実習での実践を通して、強化すべき演習項目を探ることにした。

2. 「介護過程」の理解について

「介護過程」とは、人間関係をベースに展開され、「状況の観察（事実の情報化）、アセスメント、課題の抽出、介護計画の立案、実践・実施、評価の一連のプロセスのこと」と説明されている²⁾。また、「対象者の生活上派生する問題を、解決に向けてよりよい方法は何か判断し、それにもとづいた介護方針の決定と計画の立案、実践、評価という一連のシステムをいう」³⁾としている。

本学の介護福祉士養成課程では、施設実習Ⅲ・Ⅳ段階において、「介護過程の展開を実践する」を目標として掲げている。筆者は介護実習巡回指導を通して、現行のカリキュラムにおいて体系づけられていない状況での「介護過程の展開」の取

り組みを、振り返り、実習効果を上げるために、学内において、理論や演習をどのように教授していくのかを検討したい。

学生の「介護過程」の理解を促進するために図1を作成した。

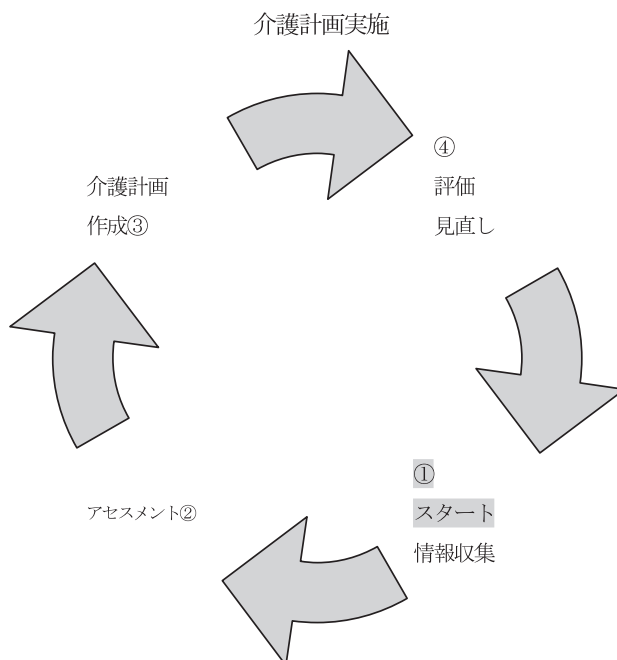


図1 介護過程の展開

図1の説明

①から②にかかる矢印：実習施設において、日常業務を通しての実習から関われる施設利用者の情報収集を、語りかけや話し相手になるなど、ケアの実際の関わりの中から得る。さらに、介護計画が立案できそうかを視野に入れて、施設に開示して頂いた利用者フェースシートにより情報を得る。

②の時点：得た情報を確認しながら、アセスメント（事前評価）を行う。アセスメントシート記入。

②から③にかかる矢印：介護計画立案に向けて、学生は取り組める課題を抽出、策定していく。

③の時点：取り組むべき課題が定まり、介護計画が確定する。対象者と施設実習指導者にも確認を得る内容とする。介護計画決定 介護計画書作成
③から④の矢印：介護計画実施、過程を記録

④の時点：実習期間に照らし合わせて、ある一定期限を学生自身が定めて、事後評価をし、介護計画実施の記録に残す。

図2の説明

一度策定した介護計画ではあったが、実施してみると修正が必要となった場合、介護計画の見直しに至った情報収集が、すでに2回目のスタートをきった状態になり、次にアセスメントに繋がる。修正を課した2度目のサイクルを実践していくことになる。

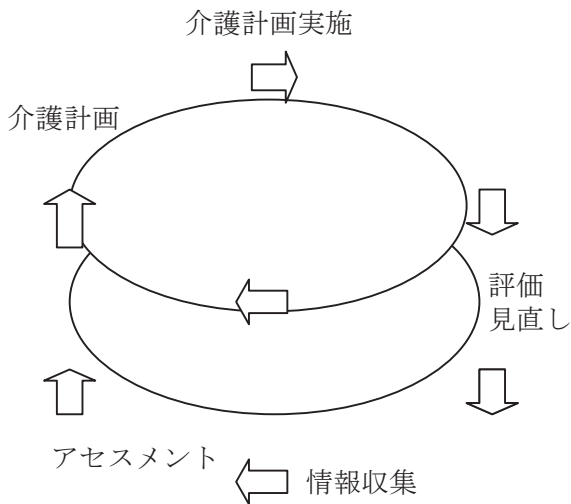


図2 介護計画実施・修正の図

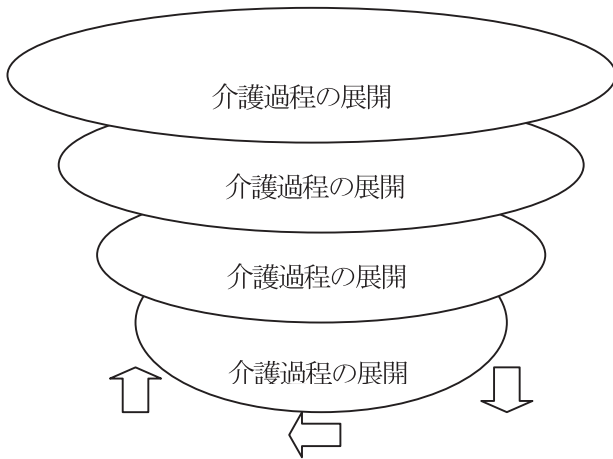


図3 介護過程の展開から介護の質の高まりへ

図3の説明

1回目のサイクルで課題解決した場合、次の課題に向けてサイクルはらせんをイメージしたサイクルへと発展していく。介護計画を実施した対象者のいわゆる「介護の質」の高まりが果てしなく上方へ「らせん」していくのをイメージしている。

以上のように、「介護過程の展開」について、概

念化させることにより、全体像を把握させる。次に「情報収集」「アセスメント」「介護計画立案」「介護計画実施」「評価」の理論と概要を学習した上で、演習に繋げていく。

3. 研究目的

- (1) 学生の介護実習Ⅲ・Ⅳを終えた段階で、重要な学習課題である「介護過程の展開」の学習の履習状況を探る。
- (2) 事前に学内において強化すべき学習内容、演習内容を検討するための資料収集、調査を行い、その結果を考察する。

4. 対象と研究方法

(1) 対象

介護福祉士養成2年課程 2年次の実習Ⅲ、Ⅳを終えた学生男子4名、女子35名の計39名（対象者学生の経てきた実習状況の説明として、5(1) 本学の介護実習、(2) 「介護過程」の位置づけを構成した）

(2) 研究方法

調査対象に行った「介護過程の展開」についての調査票による集計結果の分析と自由回答による意見の集約から考察するものとした。調査票は5(3)を参照。

5. 介護実習の現状

(1) 本学の介護実習

2年課程において450時間（10週間）を4段階に分けて実施している。以下は、各実習時期、期間、目的である。（W：週間）

<介護実習Ⅰ>（9月下旬より2W）：コミュニケーションが比較的可能な利用者との人間的ふれあいを通して、施設利用者の生活と介護の実際について知る。

<介護実習Ⅱ>（3月初旬より2W）：生活障害の程度が高い利用者を理解し、介護ニーズ把握と障害レベルに応じた介護方法について理解し、実践する。

<介護実習Ⅲ>（7月下旬より3W）：施設運営プログラムに参加し、処遇全般について学ぶとともに、ケアプラン作成及びチームの一員としての介護業務を総合的に学ぶ。在宅介護

のあり方について学ぶ。

<介護実習Ⅳ> (10月初旬より3W)：施設運営プログラムに、チームの一員として参加し介護業務を総合的に学ぶ。個別介護過程展開、記録方法を経験する。施設の運営管理、家庭との連絡調整、他機関との連携の理解、訪問介護・通所介護の実際を経験する。

(2) 「介護過程」の実習の位置づけ

「介護過程」は介護実習Ⅰにおいては特に位置づけていない。但し実習に入るまでの履修科目「介護概論Ⅰ」の内容に含まれおり「介護過程とは」に触れるにすぎない。

「介護実習Ⅱ」においては、「介護過程」の情報収集、アセスメントに取り組み、介護ニーズを把握するところまでとしている。

「介護実習Ⅲ」で、「介護過程の展開」に取り組み、ケアプラン立案・実施する。

「介護実習Ⅳ」で、再び「介護過程の展開」に取り組み、ケアプラン立案・実施する。

「介護実習Ⅲ」および「介護実習Ⅳ」で展開された「介護過程」について、いずれかの実践を事例として、「事例研究発表」につなげることにしている。

(3) 調査

学生がⅣ段階実習を終えて、調査票により「介護過程の展開」実習の実態を明らかにし、効果的な実習に繋げるための強化すべき演習項目を探るためのものである。

4件法とし、自己評価と実習後の指導に関連づけたいために記名式とした。この調査票によって成績をつけるためのものではないことを説明、協力を要請、了承された。

調査票は下記の通りである。(4件の選択肢は例以外省略した)

実習Ⅳ「介護過程」に関する調査票 および回答用紙

この調査の目的は、介護福祉士養成課程科目や介護実習について学習の効果を上げるための参考

資料といたします。記名をお願いしていますが、個人を特定するような資料公開、成績には一切関連させませんので、ご了承ください。

介護実習Ⅳを終えた学生に、実習Ⅳの「介護過程」について聞きます。

すべて4段階での選択肢があります。また自由回答するところもあります。

例 1 (できなかった) 2 (ほとんどできなかった) 3 (まあまあできた) 4 (できた)

「介護過程」とは「介護過程の展開」を「情報収集」「アセスメント(課題の整理、解決すべき課題の発見)」「介護計画作成」「介護計画実施」「介護計画の見直し」に分けて考えるとします。

- 1-1 実習中に「情報収集」ができましたか。
- 1-2 1-1で1または2と答えた方に聞きます。できなかった理由を具体的に書いてください。(自由回答)
- 2-1 実習中に「アセスメント」ができましたか。
- 2-2 2-1で1または2と答えた方に聞きます。できなかった理由を具体的に書いてください。(自由回答)
- 3-1 実習中に解決すべき課題がみつけれられましたか。
- 3-2 3-1の解決すべき課題に実習生としては満足できましたか。
- 3-3 3-2で1または2と答えた方に聞きます。できなかった理由を具体的に書いてください。(自由回答)
- 4-1 実習中に「介護計画」を作ることができましたか。
- 4-2 4-1で1または2と答えた方に聞きます。できなかった理由を具体的に書いてください。(自由回答)
- 5-1 実習中に「介護計画」を実施することができましたか。
- 5-2 5-1で1または2と答えた方に聞きます。できなかった理由を具体的に書いてください。(自由回答)
- 6-1 実習前に「情報収集」の学習が理解できていましたか。

- 6-2 6-1で1または2と答えた方に聞きます。できなかった理由を具体的に書いてください。(自由回答)
- 7-1 実習前に「アセスメント」の学習が理解できていましたか。
- 7-2 7-1で1または2と答えた方に聞きます。できなかった理由を具体的に書いてください。(自由回答)
- 8-1 実習前に「介護計画作成」の学習ができていましたか。
- 8-2 8-1で1または2と答えた方に聞きます。できなかった理由を具体的に書いてください。(自由回答)
- 9-1 実習前に「介護計画実施」のための準備学習ができていましたか。
- 9-2 9-1で1または2と答えた方に聞きます。できなかった理由を具体的に書いてください。(自由回答)
- 10-1 実習中に「情報収集」について、施設職員の協力が得ることができましたか。
- 10-2 10-1で1または2と答えた方に聞きます。できなかった理由を具体的に書いてください。(自由回答)
- 11-1 実習中に「介護過程の展開」実施に当たり、施設職員の協力が得ることができましたか。
- 11-2 11-1で1または2と答えた方に聞きます。できなかった理由を具体的に書いてください。(自由回答)
- 12-1 実習中に「介護計画の見直し」ができましたか。
- 12-2 12-1で1または2と答えた方に聞きます。できなかった理由を具体的に書いてください。(自由回答)
- 13-1 実習中に「介護過程の展開」を実施して、受け持ち利用者の満足感を得ることができましたか。
- 13-2 13-1で1または2と答えた方に聞きます。できなかった理由を具体的に書いてください。(自由回答)
- 14-1 実習中に「介護過程の展開」を実施して、あなた自身の満足感は得ることができましたか。
- 14-2 14-1で1または2と答えた方に聞きます。できなかった理由を具体的に書いてください。(自由回答)
- 15 「介護過程の展開」を実施し、受け持ち利用者とあなた自身が満足するためには、実習前にどのような学習が効果的だと思いますか。(自由回答)

(結果は図4を参照)

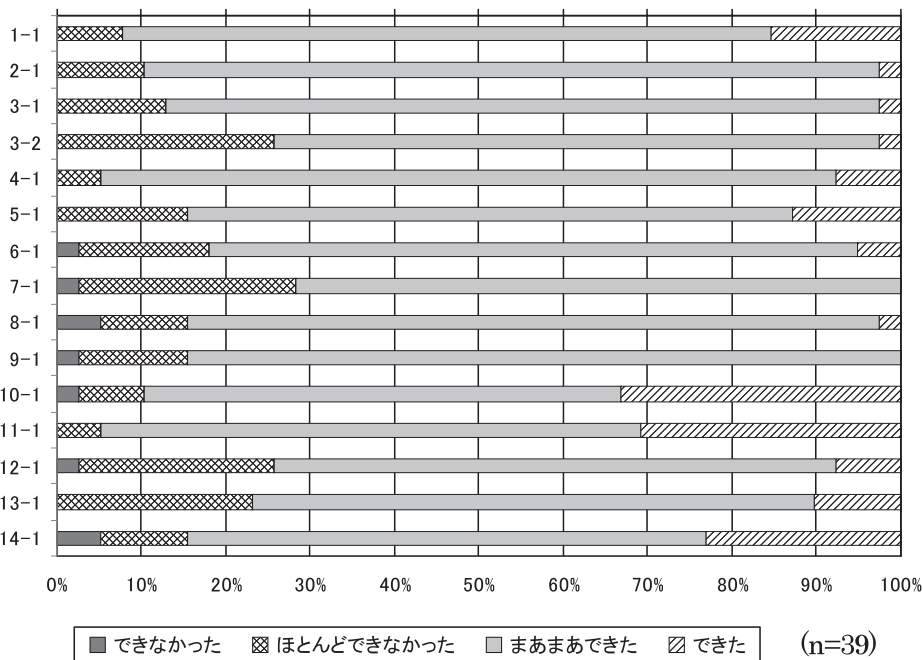


図4 質問項目別回答比率 (%)

(4) 結果と考察

実習中の情報収集から介護計画実施までの一連の「介護過程の展開」については、全くできなかった実習生はいない。これは、介護実習Ⅲ・Ⅳの実習目的が「介護過程の展開を実践する」であり、完成度は問わないため、どうしても挑戦、実施しなければならない課題達成をした結果である。しかしながら、振り返ってみると、いざ、実習で情報収集をしてみると、実習前の学内での理解が十分であった（できた）と答えた実習生はわずか2人（5.1%）である。一方94.9%の実習生は不足していたことに気付いたということがわかった。アセスメントに至っては課題を抽出できるところまでを目標にすると、実習前に理解が十分であった（できた）と答えた実習生は皆無である。実習前の理解がまあまあできた実習生は28人（71.8%）、残り28.2%はほとんど理解できていないまま、アセスメントを実施していることになる。これらと同様に、介護計画立案・実施の事前学習の理解は十分でないまでも、課題抽出が相応しいかは別として、介護計画を立案し、実施していくイメージは把握しているものと推測できる。

学生は実習で情報収集からアセスメントを実施し、時間ばかりが過ぎて行き、実際の言語、非言語のコミュニケーションは困難であったこと、状況を適切に判断する力が欠けていたと自由回答している。アセスメントから取り組むべき課題の抽出では適確さを欠き、そのまま介護計画に繋げるには無理があると感じた学生は少なくない。実習中の課題抽出に対する満足度は「ほとんどできなかった」が25.6%を占めている。しかし、介護福祉士資格取得に向けて取り組んだ実習であることから、実習内容に全く満足できなかった学生はいなかった。

アセスメントから介護計画立案に時間がとられ、極端に介護計画実施が1日、または2日のわずかな機会しか得られず、介護計画の見直しにまで至らなかった実習生が1人、ほとんど見直しができなかった実習生が9人という結果を得ている。逆に見直しをした実習生は、アセスメントが不十分であったために見直しを迫られたという見方もできる。

全体として、実習中の受け持ち利用者の満足度

は、実習を通して笑顔の表情が見られた反応を「良し」としたものが多い（自由回答より）。この満足は、果たして介護過程の展開によるものなのか、実習生がケアを通して誠意をもって関わりをもったことによる効果なのかは明確ではない。このような状況は学生も感じており、実習中の介護過程の展開への自身への満足はほぼ満足が61.5%、満足できたが23.1%であった。実習前の各学習の理解については、自分の理解が十分でないという謙虚さから、理解が不十分であったと回答する学生の姿勢が伺えるが、介護過程の展開において、学生自身の満足度の問いかけに「満足できなかった」が15.4%にも及ぶのは、難しかったということであろう。

個別ケアに繋げるためには、受け持ち利用者に寄り添い、個人の理解がいかに重要であるかの気づきがあり、学生としての力量不足や、自己理解を深める必要性の自覚にも及んだのではないかと。

加えて、学生の「介護過程の展開」のために実習施設、実習指導者の協力、指導があったことが結果として示された。業務多忙な中での指導に感謝する次第である。

以上のように調査の結果から多くの示唆を得るとともに、学生の自由回答の中から次の4点を強化すべき演習項目として考えるに至った。

1. 「コミュニケーションスキルを高める」

情報収集、アセスメントに時間を要したことから、専門職として、短時間に情報を得、何が課題に成り得るのかを判断する力が必要であると考えられる。そのためには、ICFの概念を用いての視点を身につけた上での、コミュニケーションが必要である。コミュニケーションは送信者と受信者の関係である。介護者としての受け手の感性、ある時は想像も含めて、受け取る力が必要である。拡散した情報からやがて、問題を焦点化する判断する力がある。また、送信者の真のニーズを聞き出す一歩踏み込んだ発問ができるようなスキルを数として経験しておくことも求められるのではないかと。

それには、介護の場面を想定した事例検討をしておくことが重要な演習と考えられる。

2. 「多事例を用いた介護過程展開の技法」

モデルとなるような代表的な事例をいくつか多数経験しておく、実際の実習で応用することができるのではないかと。文字で表わした明文化された介護事例を、グループのメンバーが共通したイメージの土台で話し合いがもてるのか。または、イメージの相違が、いろいろとらえ方があるということを知らせ、グループで学習することの意義を深めさせてくれる。

この事例検討には課題を焦点化し、介護過程の思考プロセスのスキルを含む。

3. 「課題の解決志向：介護過程の思考プロセス」

問題解決に向けて、思考プロセスを組み立てて、進めていくことができなければならない。「介護過程」を展開していく一番重要な考え方の訓練でもある。「考える」、「分析する」ことを学生に方向づけなければならない。

4. 「表現する力、記録」

「考えたことは文章化して」他者に伝わらなければならない。言語化することにより、思考を整理し、意味づけができる。つまり、自分の介護の状況が分かり、自分の行動が見える。新たな疑問や発見ができる。記録したものは気付かせてくれる。

個別ケアにおいて、利用者を理解すること、介護者としての自分に気付かされることは振り返って表現しないことには始まらないのである。

6. 新カリキュラムの概要

介護福祉士養成課程における教育内容の見直しがなされ、2009年度入学生より新カリキュラムが適用されることとなった。

「求められる介護福祉士像」、資格取得時の到達目標が明示された。(以下：「介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」)

「求められる介護福祉士像」

- ① 尊厳を支えるケアの実践
- ② 現場で必要とされる実践的能力
- ③ 自立支援を重視し、これからの介護ニーズ。政策にも対応できる
- ④ 施設・地域（在宅）を通じた汎用性のある能力
- ⑤ 心理的・社会的支援の重視
- ⑥ 予防からリハビリテーション、看取りまで、

利用者の状態の変化に対応できる

- ⑦ 多職種協働によるチームケア
- ⑧ 一人でも基本的な対応ができる
- ⑨ 「個別ケア」の実践
- ⑩ 利用者・家族、チームに対するコミュニケーション能力や的確な記録・記述力
- ⑪ 関連領域の基本的な理解
- ⑫ 高い倫理性の保持

資格取得時の到達目標・・・卒業時

1. 他者に共感でき、相手の立場に立って考えられる姿勢を身につける。
2. あらゆる介護場面に共通する基礎的な介護の知識・技術を習得する。
3. 介護実践の根拠を理解する。
4. 介護を必要とする人の潜在能力を引き出し、活用・発揮させることの意義について理解できる。
5. 利用者本位のサービスを提供するため、多職種協働によるチームアプローチの必要性を理解できる。
6. 介護に関する社会保障の制度、施策についての基本的理解ができる。
7. 他の職種の役割を理解し、チームに参画する能力を養う。
8. 利用者ができるだけなじみのある環境で日常生活が送れるよう、利用者一人ひとりの生活している状態を的確に把握し、自立支援に資するサービスを総合的、計画的に提供できる能力を身につける。
9. 円滑なコミュニケーションの取り方の基本を身につける。
10. 的確な記録・記述の方法を身につける。
11. 人権擁護の視点、職業倫理を身につける。

新しいカリキュラム 2年課程：1800時間

人間と社会 小計 (240h)

人間の理解 人間の尊厳と自立 (30h)

人間関係とコミュニケーション (30h)

社会の理解 社会の理解 (60h)

人間と社会に関する選択科目 (60h)

介護 小計 (1260h)

介護の基本 (180h)

- コミュニケーション技術 (60h)
- 生活支援技術 (300h)
- 介護過程 (150h)
- 介護総合演習 (120h)
- 介護実習 (450h)
- こころとからだのしくみ 小計 (300h)
- 発達と老化の理解 (60h)
- 認知症の理解 (60h)
- 障害の理解 (60h)
- こころとからだのしくみ (120h)

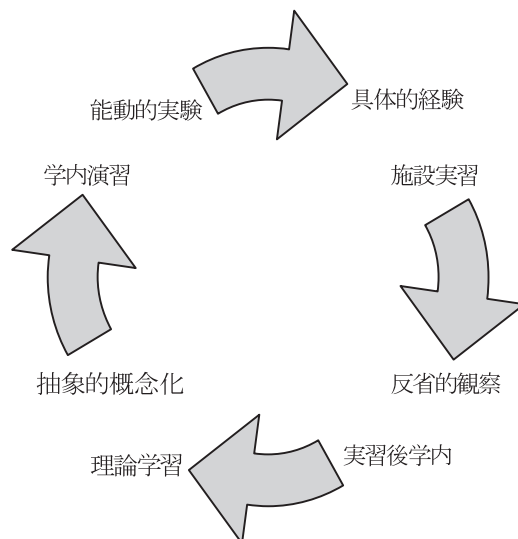


図5 経験学習サイクルモデル
(筆者が理論学習、学内演習、施設実習、
実習後学内を加筆)

2年課程新介護福祉士養成カリキュラムの基準と想定される教育内容の例(案)の中に、筆者が強化すべき演習項目として上げた、「コミュニケーションについて(記録を含む)」「介護過程」が含まれており、また「事例検討」は「介護過程」の演習や「介護総合演習」にも含まれる。今後新カリキュラムにおいて、「介護過程の展開」についての体制として学習の位置づけがなされたので、より効果的な学習が展開できるものと期待する。

7. コルブの学習理論より

『コルブは、経験学習を「具体的経験が変容された結果、知識が創出されるプロセス」すなわち「経験に基盤を置く連続的変換的なプロセス」と定義し、経験学習にとって重要なのはプロセスであると主張している。

- 具体的経験
- 反省的観察
- 抽象的概念化
- 能動の実験

が必要であり、それをサイクルとして辿っていくことにより、どのように知識の獲得が可能であるかということと、そこに至るメカニズムが個人内部でどのように生起しているかということが明らかにされると主張している。第二に学習の継続性が示唆される。具体的な経験からの学習によって導き出された概念やアイデアは固定的・普遍的なものではなく、さらなる経験によって、再形成されたり、修正されたりするものだと彼は言う⁴⁾』

図5の説明

入学後、一般教養とともに専門科目として、介護福祉を学習してきた学生は、やがて理論の基礎のもと、介護技術演習、社会福祉援助技術演習、家政演習他科目を学内で実践の前に演習を行っている。理論が抽象的概念化の部分であり、演習科目学習が能動の実験の範囲、実際に施設実習にて具体的経験、そこで今までに学習してきた内容(理論、演習)の上の実習後、反省的自分の観察が行われるのである。そして、そこで重要なのは、その実習中に適切な助言があるか否かは重要なことである。そのための巡回指導であり、施設実習先の指導者の役割でもある。

実習前にしておくべき、知識の導入、模倣的に演習しておくことでの、想像、予想は重要である。そして実習中に模索しながらも、実習前に捉えていた内容、概念化されたものを、実践を通して、確かなる介護者の専門的力量として身につけるのである。それには、学内での実習前、実習中の実習施設の環境、要因が重要であり、どれだけ考えられたか、簡単に素通りしていくような介護過程の展開では、今後の応用力の基礎ができない。また、これは実習後にフィードバックして、実習中には気づかなかったことに、改めて気づかせる。気づくだけの感性の幅を広げられるように、教授

すること、教員の役割は重要である。

そのためには、「介護過程」をどのように教授していくのか、実習前にすべき教育内容、実習中にすべき巡回教員の役割と合わせて、実習前からの教育内容との連動と実習中の介護実習施設との協働によって、大きな実習の成果に恵まれるのである。

また、実習後の振り返りの部分で事例研究発表につなげることで成果も大きい。実習教育にこの「講義」「演習」「実習」の連動協働の理論を確認し、教授法として有効かつ学生の実習教育の満足が得られればと考える。

8. おわりに

実習施設の中には、実習中毎日 15 分の反省会を開き、学生の実習状況の把握と指導をいただいているところがある。学生にとって実習は重要な気づきがあり、学習のチャンス、確認の時である。学生の中には、発言することが苦手な苦痛となることもあるが、自分の感じたことを最初は拙いながらことばにし、語り、他者の意見も聞けて、学習への深まり、疑問の確認、考えの深まりなどが得られるのである。一日経てば、忘れるかもしれない人間の記憶やさめる感情を、時を逃さず、話し合いに真摯に向き合っている。これは、大切なことである。

実習指導者は「介護過程の展開」においてもスーパーバイザーとしての役割を果たしている。そして決して指示的ではなく、反省会のスタイルと内容は適切なグループワークとなっている。指導者と学生という立場ではあるが、発言しやすい雰囲気のもとに、学生の立場にたって感じることと、高齢者施設利用者や、現場職員の介護の実態との隙間を埋めている。これは実習巡回の教員には利用者像や職員像の把握の不確かさから、助言しても、学生の納得に足る範囲の対応となっていない場合もある。その点施設の実習指導者は的確である。

毎日毎日の 15 分の積み重ねは、最終日の反省会のみで解決できるものではない。時を逃さず、コルブの学習理論に基づくと、反省的観察の上にさらなる学びのチャンスが迎えられる。学びのプロセスのらせん上昇なのである（図 6）。

各段階の介護実習を終えるごとに、学内において、事例発表、報告をすることにより、自分の行った介護に意味づけをすることが重要である。その振り返りの部分があって、さらに次の段階の実習に進むことがより効果的となる。実習後の反省的観察があつてこそ、発展的らせんが成立する。

学生は明らかに、実習によって良くも悪しくも変わる。卒業後の介護職へのモチベーションに与える影響は大きいと感じる。



図 6 実習・学びのプロセス

謝辞

本紀要をまとめるにあたり、調査に協力してくれた人間福祉学科 2007 年度生、由田美津子教授をはじめとする実習指導に当たる教員、介護施設の実習指導者の皆様に深く感謝申し上げます。

<引用文献>

- 1) 「社会福祉介護福祉士学校職業能力開発校等養成施設指定規則の一部を改正する省令（平成 11 年 10 月 22 日厚生省令第 89 号）」
- 2) 福祉士養成講座編集委員会編（2006）『介護福祉士養成講座 介護概論』p172 中央法規。
- 3) 介護過程事例研究会編（1995）『介護過程事例集』p15 建帛社。
- 4) 勝己編著（2004）『生涯学習理論を学ぶ人のために』世界思想社 p141-169 第 6 章経験学習 - D. A. コルブの理論をめぐって 山川肖美

<参考文献>

- 1) 黒澤貞夫編著 (2004) 『介護実習』 建帛社
- 2) 黒澤貞夫編著 (2007) 『ICF をとり入れた介護過程の展開』 建帛社
- 3) 浦尾和江「問題解決のための思考法」『ふれあいケア』 2008.2 全社協
- 4) 佐藤富士子「介護過程におけるアセスメント」『ふれあいケア』 2008.4 全社協
- 5) 砂川直樹「「気づきの感性」を磨く危険予知訓練『ふれあいケア』 2008.5 全社協
- 6) 嶋田美津江「その人らしい生活を支援する介護過程」『ふれあいケア』 2008.5 全社協
- 7) 斉藤悦子監修 (1999) 『看護過程学習ガイド 思考プロセスからのアプローチ』 学習研究社
- 8) 黒田裕子著 (2000) 『看護過程の教え方』 医学書院
- 9) 青木安輝 (2006) 『解決志向の実践マネジメント』 河出書房社